

# 障害者施設における入所者の健康生活の維持・向上をめざした健診・検診のあり方

近藤有子 安藤和子 戸嶋芳子 加藤智子 (飛翔の里 第二生活の家・健康部)  
古川直美 杉野緑 北村直子 平岡葉子 (大学)

## I. はじめに

障害者施設における健診・検診は障害の重度化や二次障害、入所者の高齢化による癌や生活習慣病の早期発見の目的を持つ。また、障害者が自らの健康を見つめ、健康づくりに取り組む機会としても重要である。本研究は、A身体障害者療護施設(以下施設とする)で生活する障害者一人一人の健康課題を明らかにした上で、健診・検診のあり方を検討し、さらに障害者の主体的な健康づくりにどのように活用できるかを個々の障害者ごとに検討し、方策を見出すことを目的としている。

今年度は、次の2点について取り組んだので、報告する。

1. 入所者個々について事例検討会を実施し、健康課題を明らかにする。
2. 健診・検診を活用した健康づくりグループ学習会の活動を振り返り、その成果を確認しつつ、活動の更なる充実に向けて検討する。

## II. 方法

### 1. 対象

A施設では障害の程度に応じて編成された3つのグループでの活動があるが、その内、健康づくりの学習会に参加している1グループ11名を対象とした。A施設は入所定員30名であり、入所者の主な疾患は脳性麻痺、てんかん等で重複障害が多い。今回対象とした11名は、21歳～58歳であり、身体障害者手帳の障害の程度が1級であるものが7名であった。

### 2. 実施方法

#### 1) 事例検討会

前年度に引き続き、対象の個別の情報(既往歴、生活歴、障害の程度、健診・検診結果、健康観等)を整理し、健康づくりに向けての問題及び今後の課題を見出す事例検討会を共同研究者間で実施した。事例検討の内容から個々の健康問題を抽出し、その要因や影響の拡がりや整理した。そして、健診・検診項目として何が必要か、また、影響の拡がりの予防に向けて取り組むべき課題は何かを検討した。

#### 2) 学習会の振り返り

対象が参加した健診・検診を活用した健康づくりの学習会について、実施者である共同研究者と

共に活動を振り返った。学習会は9月・11月・1月に実施した。

### 3. 倫理的配慮

対象者には、本人が理解できる方法で、研究目的や方法、参加を拒否しても不利益を被らないこと等文書を用いて口頭で説明し、同意書をもって承諾を得た。なお、研究計画については岐阜県立看護大学研究倫理審査部会において承認を受けた(平成18年9月)。

## III. 結果

### 1. 事例検討から見出した今後の課題

今年度において、1グループ11名全員の事例検討が終了した。全事例から抽出した健康問題は、四肢のしびれ、筋肉痛、便秘等腹部症状、脱水、ストレスによる過食、胃潰瘍、毛囊炎等皮膚疾患、肥満、不眠等であった。

11名中8名が脳性麻痺であったが、基礎疾患からくる変形性脊椎症、不随意運動、筋緊張、関節拘縮等がみられた。このような骨・関節の障害は、活動時の疲労や痛み・痺れ、ADLの実施困難、運動量・活動量の低下をきたし、それが活動耐性の低下や筋萎縮・関節拘縮・骨粗鬆症の進行等、廃用性の変化を引き起こしていた。運動量・活動量の低下は、腸管運動にも影響し、便秘や腹部膨満等の症状を悪化させていると考えられた。清潔保持や水分摂取などが自立していない場合は、筋緊張による発汗から毛囊炎を生じたり、脱水をきたしたりしていた。不随意運動がある場合は、打撲や表皮剥離等のリスクがあり、また、日常生活の中で転倒しやすく、容易に骨折してしまうリスクも抱えていた。筋緊張やけいれん等に対し、継続的に治療薬を服薬している入所者は、肝機能障害等の副作用が生じる恐れも考えられた。

病状の進行、運動量・活動量の低下は、機能低下や将来に対する不安をもたらし、不眠を引き起こしている入所者もいた。施設における集団生活は、人間関係や生活環境の変化等で入所者にストレスをもたらし、過食や胃の障害が生じる等の健康問題に影響していた。また、生活習慣の確立が困難であることから、肥満や高脂血症等の生活習慣病をもたらしていた。

加齢に伴う変化も見られ、難聴や白内障等によ

る視力障害は、生活範囲をさらに縮小させ、今までできていたことができなくなることによる自尊心の低下や生活意欲の低下をもたらしていた。更年期障害の症状がみられる入所者もいたが、ホルモンバランスの乱れに対して十分に対応できず、それがストレスや過食につながっていることもあった。

他にも、側弯があることからくる呼吸機能や消化機能の低下、口腔機能や嚥下機能の低下による誤嚥、神経の障害等による排尿困難、構音機能の障害による意思の伝達困難とそれに伴うストレスなどの健康問題が生じていた。

このように入所者は、障害や加齢、集団生活からくる様々な健康問題を抱えており、障害や体調を考慮した健診項目について検討することが必要と考えられた。視力や聴力検査、血液検査の項目等において、十分実施できていない現状もあるため、費用の面と合わせて今後検討していく予定である。また、疾患の早期発見と対応、二次障害の予防等入所者の生命・健康を守るためにすべきことの明確化、二次障害の予防や緊急時の対応を誰もができるような個別の健康問題を共有する方法の検討等が、課題として挙げられた。

今回の事例検討会は、看護職にとって、事例を丁寧に振り返ることで、入所者個々の健康問題を見直すことになり、系統的・総合的に専門分野の追求が大切であることの再認識や、看護職として何をすべきかを考える機会となった。

## 2. 健診・検診を活用した健康づくりグループ学習会

A施設では、年2回(2月・7月)の定期健診と、2月は30歳以上の入所者に腫瘍マーカーの検査を実施している。さらに市のサービスを利用したガン検診(大腸がん、子宮ガン、乳がん)を取り入れている。胃がん検診については、検診車での実施が困難であったり、嚥下障害等により実施が困難な状況もあったりするため、症状や訴えに応じて医療機関を受診し対応している。

これらの健診・検診の時期に合わせて、入所者が健診・検診の目的や方法、結果を理解し、自らの健康づくりに興味を持てる内容で学習会を実施した。今年度実施した3回の学習会については表に示す。

学習会活動を開始して2年が経過したが、入所者からは、「もっと色々学習したい」「毎月学習したい」との発言があり、学習意欲の向上がみられている。また、反復して学習することで入所者の自身の体に対する関心が高まり、知識の定着もみられている。入所者にわかりやすく必要なことを伝えるための学習会への準備を通して、職員が知識を再確認する良い機会ともなっている。しかし、現状ではすべきことへの対応に追われ、入所者が求めていることに対応できていないのではないかという思いも看護職には生じている。

今年度は、骨格系の二次障害予防に向け、骨格系のX-P撮影も実施した。入所者個々の骨格や関節の状態について確認できたので、その結果から療護職員とともに生活上の注意点、二次障害予防

表 今年度実施したグループ学習会

| 実施月 | 内容   | 方法   | 参加者の反応や成果  |
|-----|--|--|--|
| 9月  | 7月の健診結果の説明<br>排泄機能(「おしっこについて知りたい」という入所者の要望に応じて)                      | 健診結果の判定はB~Dであり、結果を説明しつつ、健康な生活(食事・睡眠・排泄・運動)が大切であることを説明。<br>体の仕組み、尿の生成と排泄などを図を用いて説明。尿がでないときはどんなことが考えられるかを説明。<br>膀胱容量を風船を用いて説明。 | 「うんうん」と話を聞き、わかっている様子であった。<br>入所者からでた疑問が解決でき、自らの体を知ることができた。   |
| 11月 | (女性のがん検診を受診する5名を対象に実施)<br>女性の体について<br>女性の病気がん検診                      | 体について図鑑を活用して説明した。<br>内診やマンモグラフィの方法を伝えるために、患者役と医療者役にわかれてロールプレイを実施した。  | 図鑑を熱心にみるなど興味をもって聞いていた。<br>スムーズにがん検診が受けられた。   |
| 1月  | 2月の健診にむけて腫瘍マーカーと一般血液検査について<br>インフルエンザと風邪の違い、感染経路、症状、予防<br>ノロウイルスについて | 腫瘍マーカー検査をはじめ、各健診項目について説明。<br>インフルエンザ、風邪の症状や治療、予防法(うがい、予防接種など)を説明。  | 予防策等自ら答え、日常生活でも食事前に手洗いをしていないなかまに声をかけている姿が見られる。学習会の積み重ねの成果が現れている。<br>肺炎はなぜ起きるのか、髄膜炎の症状、ノロウイルスの感染経路について質問・意見があった。<br>検査や健診の目的について質問があった。 |

への今後の取り組みを討議している。

今後は、健診・検診結果を活用し、入所者自身が二次障害予防に主体的に取り組めるよう支援することや、楽しく解りやすく、また、入所者が主体となった学習会になるよう、看護職の学習と工夫を重ねることが、課題として挙げられた。

#### IV. 今後の取り組み

事例検討会及び学習会の振り返りの結果より、今後の取り組みとして、以下の内容が挙げられた。

1. 疾患の早期発見と対応、二次障害の予防等、入所者の生命と健康を守る取り組みを明確にする。
2. 入所者から求められていることを再確認しつつ、現状の看護活動を見直す。
3. 二次障害予防への取り組みを入所者とともに学習、討議を進める。
4. 障害・健康への取り組みを職員間で共有し、緊急時対応をはじめ、医療活動を検討する。

#### V. 共同研究報告と討論の会での討議内容

討論には、障害者施設での健診を担当している健診センターの看護職と知的障害者施設の看護職が参加した。

健診センターの看護職から、定期健診時の採血において、痺れ等の反応が捉えにくく、神経損傷が怖いという思いが話された。健診においては、健診担当機関から神経損傷のことも踏まえて同意書への記入を求められたことがあった、採血時に抑制を過度に行う施設もある等の発言もあった。しかし、討議に参加した看護職の中には、健診を繰り返すことで、入所者との面識もでき、お互いに慣れてくるので、反応を確認することができるのではないかと感じているものもいた。ただ、入所者の反応の方法について熟知している施設看護職の協力体制も必要と考えられ、次回健診時には対応したいと、A施設看護職より回答があった。また、A施設においては、入所者がある程度、健診・検診内容や病気のことについて理解し、健診の必要性を認識して受けているので、抑制は必要ないとの意見があった。健診等同じ取り組みを繰り返すこと、勉強会による入所者自身が自分たちの病気に関して学習することの大切さについて、参加看護職間で共通認識が得られた。

他に、健診センター看護職からの要望として、駆血帯をすると過緊張になる入所者もいる為、事前に筋緊張が強まりやすい入所者の情報を提供してほしいこと、血液感染のリスク等考慮し感染

症検査を実施してほしいことが挙げられた。ただ、検査項目を増やすには、施設の費用供出の問題もあるため、施設の理解が必要である。施設の看護職から要望を出すだけでは実現できないこともあり、健診センターから施設に要望を出してもらう等、施設看護職を後押しする取り組みが必要であることも話された。

健診・検診の取り組みに関しては、入所者は「痛い」ということをうまく訴えられなかったり、訴えていても周囲が理解できなかったりするため、血液検査で腫瘍マーカーを取り入れたが、健診センターが資料を送付してくれる等協力してくれたこともあり、取り組みを進めることができたこと、A施設看護職より発言があった。他施設看護職からは、基礎疾患で脳性麻痺、てんかんのある方が発熱し、病院で胸部レントゲン検査を受けたところ胸膜炎であったが、検査時に肝がんのターミナル期であることが発覚したとの事例が提供された。食事はしっかり食べなければいけないとの考えのある方で、体調が悪くても無理して食べてしまっていたために気付くことができなかった、このようなことがあるのかと思うと怖く、今後どのように取り組んでいけばよいのか、悩んでいるとの事であった。腫瘍マーカー等の検査項目に関しては費用を要することから、施設管理者との調整を図りながら、健康を守る看護職として、検査項目を検討する必要がある。

学習会については、入所者が健診・検診の必要性を認識して受けている状況からも、学習会の成果が感じられ、よい取り組みであると肯定的に評価された。看護職は、様々な道具を作成する等、学習会の内容を工夫し、楽しく取り組んでおり、それにより入所者は、自分自身のことだけでなく、なかまのことも理解できるようになってきている。今後は地域の公的機関との連携もとりたいながら、学習会を発展させていきたいと、A施設看護職より発言があった。

A施設ではよい取り組みをしているが、他施設ではどうなのか、他施設との関わりはあるのかといった質問が参加者よりあった。他施設と協力したいが、近隣施設同士でのつながりは薄く、各施設で閉ざされている現状がある。また、祭り等の取り組みはあっても、近隣の居住者との生きた交わりが忘れられている現状もある。しかし、閉ざされた施設のままでよいはずもなく、外部の方がもっと入りやすい場、気軽に入所者に会いに行けるような場にしていく必要があることも課題として挙げられた。